

日本語における「と」の役割りについて

1F-1

鈴木恵美子* 成原克恵**

*日本アイ・ピー・エム株式会社 東京基礎研究所

**東京女子大学

1. はじめに

我々は従来より、汎用的な日本語解析システムの実現のために新聞記事を対象として実験を続けている。しかし、より汎用性の高いシステムをめざすと、そこに必然的にあい昧さの問題が生じてくる。本稿ではあい昧さを除くための一手法として、大量の言語データを収集して分析し、言語自体に対する知見を実証的に得ることを試みたので、それについて報告する。

2. 目的

日本語の解析は形態素解析、構文解析、格解析、など多岐にわたってそのあい昧さが指摘されている。そこには単語の品詞のあい昧さの問題もあれば文節の係り受けのあい昧さ、表層の格が埋めている深層の格のあい昧さなど、どれをとっても日本語を機械で処理する際に議論される点が多多く残されている。

今回我々は、様々な役割を担う「と」について分類および考察したのでそれについて述べる。

「と」は、

- 再統投する考えはあるかとの質問に答える。(A)
[格助詞]
- 夜になると出てくる。(B)
[接続助詞]
- 生き生きとふるまう。(C)
[慣用表現]

のように、大きく分けて3種類の「と」があると考えられる。一見して格助詞、接続助詞、慣用表現と見分けのつくものもあるが、そうでない「と」も数多い。

これらは本来、形態素解析の段階で上記(A)、(B)、(C)の区別がつくことが望ましいが、現在の自然言語処理ではなかなか容易でない。

本研究の目的は、人手でこれら「と」を分類し、形態素解析の時点で品詞を決定し、さらにその用法上の特長を見出すことである。

3. 「と」の分類

今回、「と」を上記のように大別して3種、さらに細分類して9種類に分類することとした。

I. 格助詞

- a. 引用 いわゆる引用のほか、擬似引用等も含む
- b. 並列 英語にすると"and"の意味のもの
- c. 随伴 英語にすると"with"の意味のもの
- d. 結果 「と」を受ける動詞の主語が、「と」の前にくる名詞と一致するもの
- e. 連語 格助詞相当連語「～として」、連体修飾表示「～としての」の一部
- f. 「と」する 補助動詞「する」の直前の「と」

II. 接続助詞

III. その他

- a. 『情況化』の「と」
- b. 慣用的表現に含まれる「と」・・・決して分類不可能ではないが、まとめて慣用的に扱えるもの

表1. 「と」の分類

	頻度(回)	割合(%)
I a	3353	43.1
I b	1061	13.7
I c	919	11.8
I d	619	8.0
I e	540	6.9
I f	180	2.3
II	814	10.5
III	288	3.7

以上の分類基準に基づき、実際の新聞記事データにあたり、それぞれの出現頻度について表1にまとめた。

この表を見ても明らかなように、引用(I a)、並列(I b)、随伴(I c)といった"格助詞らしい"「と」の使用率が非常に高く、これら三つで全体の約7割を占めている。特に(I a)の割合が高いが、これは対象が新聞であることと大きく関わっていると考えられる。

同時にこれらの「と」を受ける動詞についても調査したところ、必ず相手を必要とする動詞(ここでは随伴性の動

The Role of "TO" in Japanese

Emiko SUZUKI* Katsuo NARIHARA**

*Tokyo Research Laboratory, IBM Japan, Ltd. **Tokyo Woman's Christian University.

詞と呼ぶ：「争う」「結婚する」「違う」などが「と」の後ろに続いた場合、その「と」は随伴の働きをする確率が非常に高いことがわかった。随伴についてはほとんど動詞を選ばず、本来相手の必要でない動作に対しても臨時に相手を伴う、つまり臨時に随伴性を帯びることがある（例1参照）。この場合、飲みに行くのに必ずしも相手はいらないが、「飲むという行為」を共にするという意味で臨時に随伴性を帯びているのである。

（例1）昨日は一日あの人と飲んだ。

ここで、引用の「と」において『引用性』というものを考えてみると、「いう」「考える」「述べる」など、もともと「句+と」を受けるのが自然な動詞（例2参照）と、不自然な動詞（例3参照）が存在する。不自然とみられる動詞が「句+と」を受けている場合は臨時に引用性を帯びていると考えられるが、これらを機械処理しようとする場合、臨時に引用性を帯びる、いわば擬似引用ともいべき動詞をどのように扱うか、問題の残るところである。

（例2）五人に一人が高齢者という六町なのだ。

（例3）桜の花びらが雪と降る。

しかし、新聞記事1か月分に出現した、引用あるいは随伴の「と」を受ける動詞、のべ8676個、異なり語数633個の動詞の中で、出現数4336回、しかも随伴の意味の「と」の1回も現れなかった動詞「いう」や、出現数597回で同じく随伴の意味の「と」の1回も現れなかった動詞「思う」など、非常にはっきりした性質を示したものについては、「と」の役割を限定してもよいと思われる。

I dは一般に「転化の結果」といわれるものである。今回ここでは、「と」を受ける動詞の主語が、「と」の直前にくる名詞と一致するもの」に限定してみた。この条件により、結果の「と」を受けうる動詞は「する」「なる」「映る」「化す」「みえる」の5種類に絞ることができた。

分類でI dとしたのは「状態の「と」」ともいえるものである。「山と積み込む」というのは「積み込んだ結果山となる」意であって、「結果の「と」」の特殊なものと考えられるが、実際には調査した2万例中、資料にも示した1例のみしか出現しなかった。

その他、特殊な形で出現する「と」について調査したのでその結果の一部を表2に挙げる。

以上見てきたように今回、助詞の「と」に注目してその分類を試みた。この結果非常にはっきりした性質をもつ「と」については形態素解析の段階でのあい昧さを減らせることがわかった。

表2 「と。」の分類

表現	全数	引用	接助	その他
」と。	23	23	0	0
、と。	14	14	0	0
ーと。	1	1	0	0
ーと。	1	1	0	0
・・・と。	1	1	0	0
ないと。	8	8	0	0
だと。	3	3	0	0
命令形+と。	1	1	0	0
その他+と。	15	8	2	5

以下に、分類ごとの用例を挙げる。

資料

- I a 「まとめてもらいたい」などと述べた。
大島という島
- I b 「国と地方」
専門家と素人の差
- I c 内閣記者会と会見し、・・・
稲とは別に・・・
- I d ソフトを中心としたコンピューターの共同開発
池北線が廃止対象となる。
- I d 山と積み込む。
- I e 国家としての信頼性
意図をはっきりさせたものとして画期的だ。
- I f 収めようとする。
失うまいとする。
- I I 同通信によると、この原潜は・・・
必要最小限は用意しないといけない。
- I I I a 生き生きと
はっきりと
- I I I b 何十回となく
というのは

文献

1. 水谷静夫: 国文法素描。『朝倉日本語新講座3 文法と意味I』(1983).
2. 藤田保幸: 文中引用句「～と」による「引用」を整理するー引用論の前提としてー。『論集日本語研究(一) 現代語編』、明治書院(1986).
3. 松下大三郎: 標準日本語口語法。中文館書店(1925).